様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３５３０９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２３５１

研究課題名（和文）精神障害者の存在肯定のためのアーティスト共働型地域音楽活動に関する方法論的研究

研究課題名（英文）A Methodological Study on Artist Collaborative Community Music Activities to Affirm the Existence of People with Mental Disabilities

研究代表者
田中　順子（TANAKA, Junko）

川崎医療福祉大学・リハビリテーション学部・准教授

研究者番号：７０２９９２６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、精神障害者と地域住民を包括した実験的音楽活動グループを地域に創生し、音楽表現による精神障害者の存在肯定の可能化を証明し、音楽活動での共有体験を通して、社会包摂および社会と個人との相互変容を試みることであった。
　研究成果として、本音楽活動による精神障害者の存在肯定の可能化は、他者からの賞賛により自信を深めたことが発言からも確認でき、目的は達成されたと考える。音楽活動での共有体験を通して社会包摂に向けての社会と個人の相互変容を試みることは、精神障害者と地域住民が同じ作品を作り上げるという課題作業に取り組んだことにより、共同体としての意識づけを促すことができたと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　精神障害者（以下、障害者）への偏見が根強く残る社会にあって、障害者は自己の存在肯定が希薄になりがちである。今回の実験的音楽活動の実践研究により、障害者の豊かな芸術表現を非障害者が賞賛することで、障害者の自己肯定感が向上した。さらに障害者と非障害者がともに活動を行うことによって、両者の境界を緩和することが可能となった。
　このような個人的・社会的変容は、誰もが自他の存在を受け入れ喜びあえる、成熟した社会創成への重要な第一歩となった。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this research is to develop an experimental music activity group including parsons with mental problems and residents in the area and to prove the possibility of affirming the existence of persons with disabilities through musical expression. It also is to try to enhance social inclusion and mutual change between society and the individual through the shared experience. For this purpose, thirty music activity sessions were held monthly, with the group of both people with disabilities and the general public. Interviews were conducted with participants to evaluate the music activities and the result was published in Kawasaki Journal of Medical Welfare 25 (1), which reports participants’statements that their self-confidence and self-affirmation were improved and that their behavioral changes such as freedom of self-expression have occurred.

研究分野：芸術学

キーワード：地域音楽活動　精神障害　社会福祉

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究代表者はリハビリテーションの一職種である作業療法士（以下、OT。作業活動を治療手段にその人らしい生活を取り戻す支援をする職種）として、医療機関で音楽活動を実践してきた。そこで見たものは、医療制度の元、精神疾患患者として診断を受けることにより、人が生きる上でもっとも大切な自己肯定感が剥奪されていく現実であった。そのため、存在肯定を一貫して研究し続け、障害を生かす芸術表現として“障害肯定芸術”概念と現代アートの導入を提唱した。

医療に属する OT では、コミュニティー音楽療法などの新しい世界の潮流をいち早く導入している音楽療法に比べ、芸術表現活動に関する感度の低さは否めず、大きな発展性がないことが問題であった。この課題に対しては、障害を負った音楽家事例の分析および障害学、美学・芸術学等の学際的観点から検討を続け、継続して発表し改善に向けて訴えてきた。

一方社会では、精神障害者の芸術活動が福祉施設を中心に盛り上がりを見せており、医療と福祉の乖離は明らかである。この乖離と OT 問題を解消する試みとして、治療目的をもたず一人間として表現を楽しむ音楽体験を供する目的で、ソングライティング（歌作り）活動を外来患者を対象に病院外の施設で開始した。その結果、自信回復などの肯定的変化が顕著に認められ、有効性が証明された。以上より、自己肯定感に対する音楽表現の有用性には一定の確信を得ている。

このような背景のもと、OT にないコミュニティー概念の導入、自己肯定感の回復を確実化するより先駆的な音楽方法論の検討、地域に開かれた音楽活動の理論構築の必要性を強く認識したため、アーティストと OT との共働による音楽活動を土台とする本研究を着想するに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、精神障害者と地域住民を包括した実験的音楽活動グループを地域に創生し、音楽表現による精神障害者の存在肯定の可能化を証明するとともに、音楽活動での共有体験を通して、社会包摂および社会と個人の相互変容を試みることであった。具体的な目標として、①音楽創造のワクワクするような体験を提供する、②精神障害者と非精神障害者の相互理解の場をつくる、③ひきこもりや日常生活に困難を感じている人たちに社会参加の機会を提供する、とした。

３．研究の方法

2 名のアーティストと OT が共働で、精神障害者と地域住民を対象として、ソングライティングや自由即興などの実験的音楽活動を実施した。セッションは毎月 1 回、1 回につき 2 時間とした。その後は会場に隣接するカフェでコーヒーを飲みながら交流する時間をもった。セッションはアーティストがリーダー、OT はサブリーダーを担当した。分析のために、各セッションの様子はビデオレコーダーで、演奏はヴォイスレコーダーで、作成した歌詞は写真で記録した。また、参加者らに本音楽活動の感想や自身の変化等についてインタビューを行った。本音楽活動の効果、存在肯定を促す音楽活動の構造、参加者の行動変容・意識変容を探究するために、活動分析、行動分析、完成した楽曲の分析、参加者らの発言の分析等を実施した。分析の解釈には、現象学とナラティブ分析によるエピソード記述を含む質的研究手法を用いた。

４．研究成果

音楽活動の参加者は精神障害者と地域住民、アーティスト等を含めて、1 回の平均参加人数は約 10 名、実施回数は 30 回であった。当初、参加者らは学校教育で身についた従来の音楽表現から逸脱することができず、馴染みのない実験的音楽では創造性が発揮できなかった。しかし、回が進むに伴い自由即興などの新しい音楽表現にも慣れて、勇気をもって大きな音で楽器を演奏したり、積極的にソングライティングのための歌詞を提案したりするようになり、すべての参加者の行動に肯定的な変化が認められた。ほぼ毎回参加した数名の参加者について、以下にまとめる。

（１）ケーススタディー

【A 氏】60 歳前後の女性。統合失調症と考えられる精神疾患のために通院している。異常な服装と化粧、髪型をしており、悪臭を放っている。性格は外向的で、世界情勢、宗教、文化、芸術など幅広い興味を持っている。しかし、会話の内容は転導しやすくまとまりに欠けていた。音楽活動参加の当初は、「今日はやりたくない」「私には難しすぎる」と躊躇していたが、次第に積極的に話しかけ、躊躇することなく歌えるようになった。回が進むにつれ、演奏を拒否することはほとんどなくなり、楽器演奏にも積極的に取り組むようになった。作詞では非常にセンスの良い発言をして他の参加者らから感嘆の声があがり賞賛された。次第に会話に論理性が生まれ、化粧も普通になった。インタビューでは、「ここでの音楽がとても楽しく運命的な出会いのような気がする」、「活動参加により人間関係を形成することができる」、「ここでの音楽は新しいことに挑戦させてくれる」という発言がみられた。

【B 氏】40 歳代の男性。会場を提供してくれている教会の牧師である。現代アートに強い関心を持ち、地域活性化にも積極的であった。セッションでは多くの提案をして、場の盛り立て役となりリーダーをアシストした。他者を音楽活動に誘うことにも積極的であった。インタビューでは、「ひきこもりの人や自己肯定感の低い人の居場所を本活動が提供できるように、社会からの要

請に応えられるようにしたい」という発言がみられた。

【C 氏】40 歳代の男性。うつ病で通院している。音楽活動よりも、カフェでの雑談を楽しみに参加していた。当初、音楽活動では「何をすればいいのか全くわからない」と座っているだけであったが、次第に自分の考えを述べることができるようになり、特にソングライティングに積極的に参加するようになった。本活動以外の日にもカフェに遊びに来るようになり、本活動への参加を契機に対人関係が拡大していった。インタビューでは、「この活動の目的の一つは障害の有無に関係なく、皆が音楽を通して健康になるということだと思う」という発言がみられた。

（２）研究目的および目標の達成度

目標であった、①音楽創造によるワクワクする体験を提供することは、参加者の言動から十分達成できたと考えられる。②精神障害者と非精神障害者の相互理解の場をつくることは、参加者間での精神障害者に対する差別意識は観察されず、どの参加者に対しても公平に発言や作品発表を賞賛する態度がみられた。これらより、音楽を介したコミュニケーションによる人間関係の醸成に成功したと考えられる。③ひきこもりや日常生活に困難を感じている人たちに社会参加の機会を提供することは、ひきこもりの参加者は数名いたが継続しての参加は困難であった。インターネットを介した参加形態により本課題を解消する可能性が考えられる。

研究目的であった、本音楽活動による精神障害者の存在肯定の可能化は、他者からの賞賛により自信を深めたことが発言からも確認でき、目的は達成されたと考える。音楽活動での共有体験を通して社会包摂に向けての社会と個人の相互変容を試みることは、精神障害者と地域住民が同じ作品を作り上げるという課題作業に取り組んだことにより、共同体としての意識づけを促すことができたと考える。さらに、精神障害者ならではの独創的表現や、障害の有無に限らず共通点も多いことへの気づきにより、精神障害者に対する奇妙な、理解不能なという先入観を払拭することができたと考える。社会変容に至るには長期的な取り組みが必要であり、今後も継続して地域コミュニティーや自治体と連携して進めることが重要となる。

（３）本音楽活動で用いた実験的音楽の意義

本音楽活動では、方法論や技術の改革のみならず、ケアの考え方の転換を提案した。本音楽活動の最も重要な特徴は、使用される音楽にあった。自由な即興演奏や無調音楽など、時に前衛的、あるいは過激な音楽とされる様々なジャンルの音楽を用い、従来の音楽概念にとらわれない音楽を提供した。これは、音楽療法や作業療法などで頻繁に使用されるポップソング、歌謡曲、童謡等の歌唱や音楽鑑賞のような従来の音楽活動を次元的に超越している。

こうした音楽の自由度の高さは、参加者が音楽の能力や訓練の条件なしに参加することを可能とし、自分のやり方で自分表現をする機会を提供した。このことが「その人らしさ」を保障し、自己肯定感向上の要因に繋がったと考える。

学術的意義・社会的意義

精神障害者への偏見が根強く残る社会にあって、精神障害者は自己の存在肯定が希薄になりがちである。今回の実験的音楽活動の実践研究により、精神障害者の豊かな芸術表現を非精神障害者が賞賛することで、精神障害者の自己肯定感が向上した。さらに精神障害者と非精神障害者がともに活動を行うことによって、両者の境界を緩和することが可能となった。

このような個人的・社会的変容は、誰もが自他の存在を受け入れ喜びあえる、成熟した社会創成への重要な第一歩となった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Junko Tanaka	４．巻 3
２．論文標題 Effect and Significance of Songwriting for People with Mental Disorders: Pilot Trial of Collaboration Between an Occupational Therapist and a Musician	５．発行年 2018年
３．雑誌名 JASMIM Journal	６．最初と最後の頁 3-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Junko Tanaka
２．発表標題 Effect and Significance of Songwriting through Collaboration with a Musician
３．学会等名 IV International Congress of Occupational Therapy（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	沼田　里衣 (Numata Rii) (10585350)	大阪市立大学・都市研究プラザ・特任准教授（テニュアトラック） (24402)	
研究分担者	三宅　博子 (Miyake Hiroko) (40599437)	明治学院大学・文学部・研究員 (32683)	
研究協力者	若尾　裕 (Wakao Yu)		